

論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル:

Trajectories of psychological status of mothers of infant with nonsyndromic orofacial clefts: a prospective cohort study from the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

口唇口蓋裂と母親の精神状態の関連を検討した研究

ユニットセンター(UC)等名: 北海道UC

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Cleft Palate-Craniofacial Journal

年: 2020 月: 8

巻:

頁:

筆頭著者名: 佐藤 遊洋

所属UC名: 北海道UC

目的:

本研究では、妊娠15週目、27週目、生後1ヶ月後、6ヶ月後、12ヶ月後の各時点での口唇裂と口蓋裂(GLP)を有した子供、口唇裂のみ(CL)を有した子供、口蓋裂のみ(OP)を有した子供の母親の心理状態を調査することを目的とした。

方法:

調査に参加した84,602名の母親と子供が統計解析に含まれた。そのうち、GLPを有した子供は72名、CLを有した子供は46名、CPを有した子供は30名であった。妊娠15週目、27週目、生後12ヶ月後の母親の心理状態は心理的ストレスで評価した。生後1ヶ月後、6ヶ月後の母親の心理状態は産後うつで評価した。

結果:

先天性疾患を有していない子供の母親と比較して、GLPを有する子供の母親は、妊娠27週目の時点でより高い心理的ストレスを有していた(リスク=1.36)。生後1か月の時点での産後うつ病でも高いリスクを有していた(リスク=2.21)。CPを有する子供の母親は、妊娠27週の時点で高い心理的ストレスを有していた(リスク=1.62)。生後6か月後の産後うつでも高いリスクが認められた(リスク=1.86)。子供がCLを有していることと母親の心理状態との間には有意な関連は認められなかった。

考察:(研究の限界を含める)

本研究はいくつかの制限を有している。1つ目は、母親の心理状態に大きな影響を与える可能性が高い出生前診断などの重要なイベントについての情報を得ることができなかったことである。2つ目は口唇口蓋裂を有する子供の数が少なかったため、偽陰性の可能性があることである。

結論:

本研究では、CLPまたはCPを有する子供の母親は悪い心理状態であるリスクを有していた。しかし、生後12か月後では有意な関連は認められなかった。このことは、口唇口蓋裂を有する子供を持つことに関連したストレス要因は、1年後には減少することを示唆していると考えられる。